

『観光科学研究』の創刊にあたって

観光のもともとの意味は「国や地域の光を観て、そこから優れた事象や現象を学びとり、自らの知識や精神を啓発し高めること」にあった。同様に、ツーリズムも地域や土地を巡回して新しいものを見出し、自らを啓発することを意味していた。しかし、こうした観光やツーリズムの視点や考え方は狭く、形骸化する傾向にあり、現代社会においてはより広義に観光やツーリズムを捉えることも重要となってきた。

地域の資源や環境への理解をより深め、それらを見直し、保護保全したり適正利用したり、それらの多様なコンテンツをコンテクスト化するための知識や技法を学ぶことも、観光やツーリズムに関する研究の肯綮に当たる。具体的には、地域の人にとって住みやすい環境を維持しながら、そこを訪れる人とともに楽しみや安らぎを共有し享受していくために、いかなる研究や提案が可能であるかを私たちは議論しなければならない。都市や農山漁村、さらに山岳から平野、そして河川や海域に至るまで多様な環境において、ビジターとホストの関係はどのように構築していくのが望ましいのかを議論することもまた重要である。これらの課題は観光やツーリズムの研究として見落としてはならないものであり、それら課題の解明は地域の振興や活性化にも貢献することになる。

当然のことながら、観光とツーリズムに関わる事象や現象は、地域や土地の自然環境や社会・経済環境、および歴史・文化環境や政治・政策環境と関わり合いながら展開している。また、それぞれの環境も相乗的・螺旋的に連関しながら、観光とツーリズムの事象や現象に影響を及ぼしている。分析・議論が個別的な研究領域に蝸壺化しては、超複雑系の入り組んだ事象や現象の1つの側面を識別しただけで終わってしまうであろう。ゆえに、われわれが目指す観光科学は観光やツーリズムに関わる事象や現象を、諸環境との関わりの中で複眼的な視点をもって総合的に捉えなければならない。これが超複雑系の事情や現象の解明を合理的なものとし、地域の抱えた諸問題を的確に理解し対処するアイデアや術を与えるものとなる。

このような問題意識に立脚し、首都大学東京の自然・文化ツーリズムコースおよび観光科学専修は、観光やツーリズムの学府として構想された。複数の分野に跨る研究者が手を取り合うことで、学問としていまだ体系だったものになっていない観光学やツーリズム研究に科学の目を与えようと、私たちは考えた。目指したものは、既往の観光学やツーリズム研究に最も欠けている観光を科学的に分析する目と分析するためのテクニックを研ぎ澄ます場の構築であり、観光学やツーリズム研究を『観光科学』へと押しあげる最高学府の創造であった。足かけ3年に及ぶ準備期間を経て、その成果は自然・文化ツーリズムコースと観光科学専修という2つの形となって結実しようとしている。多摩丘陵を吹き抜ける風に微かな春の気配が混じり始めた2008年のいま、『観光を科学する』ことを目標とし、後進に確かな学びの舎を供する理念の下に参集した私たちの確かな決意と情熱、そして研究対象へ向けた科学の眼差しを記録に換えていくためのモニュメントとして、ここに学術誌『観光科学研究』を創刊した。

観光科学研究の柱は大きく3つある。つまり、自然ツーリズム学と文化ツーリズム学、および観光情報学である。自然ツーリズム学と文化ツーリズム学は、いわば観光科学研究という名の車を前進させていく車の両輪であり、観光情報学は自然と文化のツーリズム学を結びつける車軸にあたる。2つの車輪と1つの車軸のどれが欠けても、車が前へと進まないように、観光科学研究は前進しない。

自然ツーリズム学と文化ツーリズム学、および観光情報学が1つのセットになってこそ、観光科学研究の前進は約束される。

自然ツーリズム学は地域の資源や環境に基づくソフトツーリズムを対象とし、エコツーリズムやルーラルツーリズムなどの研究がその分野のものとして周知されている。首都大学における自然ツーリズム学は地理学と生態学のフレームワークに準拠しながら、地域の資源や環境の保全保護と適正利用、およびそれらの調整システムを研究することに特徴がある。したがって、私たちの目指す自然ツーリズム学は、地域の資源や環境を見直しながら再編し、その持続的な利用や調整を進めるメカニズムやシステムを明らかにすることに主眼をおいている。そして、私たちの自然ツーリズム学の方法は地理学の地人相関プロセスや生態学の遷移プロセスなどのフレームワークを援用した演繹的・帰納的なものであり、それは地域の「*raisons d'être*」や「*terroir*」を解明するものでもある。

一方、文化ツーリズム学は地域の資源や環境を対象とすることは自然ツーリズム学と変わらないが、地域の資源のなかでも特に建造文化へ注目する点に特色がある。個々の建造物が対象となる場合もあるし、個々の建造物の集合体としての街並みが対象になる場合もある。さらに、複数の街並みを組み合わせた都市の構造や文化も研究の対象となる。これらの対象を分析・議論するフレームワークは建築学や土木工学、および都市計画などの工学的なものに準拠している。実際、私たちの掲げる文化ツーリズム学には、地域の建造文化的な資源をどのように保存し活用するのかを策定・計画するための「まちづくり」や「観光まちづくり」の科目が含まれている。地域資源を定性的・定量的に捉える技法や地域における資源の開発、政策の計画・立案に必要なデータ収集および分析も、文化ツーリズム学には求められる。

一方、自然ツーリズム学と文化ツーリズム学とを結びつけ、観光を科学するために必要不可欠な役割を担うのが、観光情報学である。地域や土地には多種多様な資源や環境要素がランダムに分布し、それぞれが独自の性格（場所性、ロカリティ）や位置（サイト、シチュエーション）をもっている。地域づくりや地域の観光化にあたっては、個々の地域資源や環境要素のコンテンツを組み合わせることでコンテキスト化し、有意な情報として外部に発信しなければならない。そのような地域資源や環境要素のコンテキスト化、および情報発信が「観光を科学する」当コースおよび専修の大きな特徴の1つとなっている。

観光科学の概念がそうであるように、『観光科学研究』もこれからの雑誌である。観光やツーリズムに関わるあらゆる事象や現象を科学の視線で複眼的に捉えて分析し、観光やツーリズムを科学と呼ぶにふさわしい研究対象へと昇華しようとするすべての人々に、この雑誌の門戸は開かれている。観光を広義に捉え、それに関するさまざまな問題に学術的・学際的な関心を寄せる皆様からの意欲的な投稿を期待するとともに、この雑誌が観光科学の発展に大きく貢献することを祈念したい。

平成20年2月1日

首都大学東京 大学院 都市環境科学研究科 観光科学専修

秋山哲男・菊地俊夫・井出 明・吉田 樹・鈴木晃志郎